DAT
Dialogue on Art and Technology
藝術と技術の対話

講座シリーズ
「アート&テクノロジーの構築概念」

申込期限：
2026年5月27日（水）18:30まで
料金（第1回オリエンテーションを除く）：
一般 ¥6,000｜U25 ¥3,000
聴講方法：
本講座は下記3種類での聴講が可能です。
・Zoomウェビナー視聴（当日）
・会場参加（当日）
・アーカイブ視聴（開催後）

＊受講のみなさまには、各回毎に登録リンクの記載された聴講方法を送付します。（Zoomからの自動送信メール）
＊会場での観覧については、受講者に向けて事前にご案内します。
＊アーカイブ視聴は2026年5月31日［日］まで（特別回を除く）。

申込先：
下記サイトのフォームより、
必要情報をご記入のうえお申し込みください。
https://dat.1kc.jp/lecture

プロジェクトについて

◉「藝術と技術の対話（DAT）」は、テクノロジーに内在する思想や価値体系を問い直し、「コンセプトの開発」と「展覧会の策定」に必要な能力の育成を目的としたプロジェクトです。
◉講座シリーズ「アート&テクノロジーの構築概念」のほか、2026年5月からは札幌およびニューヨークで展覧会をつくり出す新たなプログラムを開始します。これは、展覧会をOJT（実地研修）の環境とし、作品やコンセプトを言語化する能力、そして鑑賞体験を通じて知的刺激と対話を生み出す展覧会の策定能力の育成に取り組むものです。
◉さらに、本プログラムでは、山口情報芸術センター［YCAM］や札幌国際芸術祭を含む国内外の専門機関と連携し、同分野の実践的かつ国際的な新たな教育基盤を構築していきます。

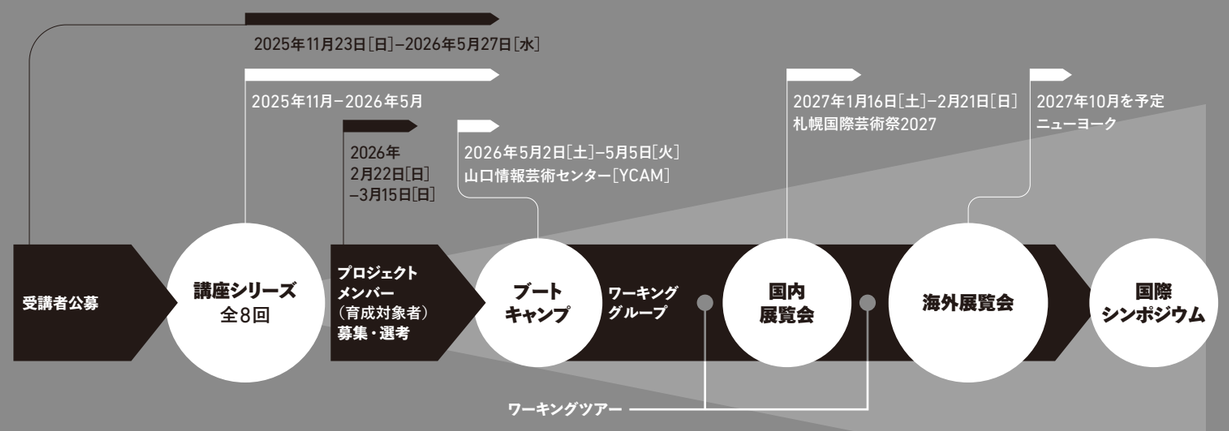
エグゼクティブ・ディレクター：
藤幡正樹
メディアアーティスト

プロデューサー：
廣田ふみ
株式会社イッカク
代表取締役社長

2025年度（令和7年度）
1. 講座

2026年度（令和8年度）
2. ブートキャンプと国内展覧会

2027年度（令和9年度）
3. 海外展覧会



4. 調査研究

お問合せ
「藝術と技術の対話（DAT）」事務局［株式会社イッカク内］
Email：hello@dat.1kc.jp
@ikkac_jp
@ikkac_jp
@1kc.jp
https://dat.1kc.jp

主催・企画制作：
株式会社イッカク

助成：
文化芸術活動基盤強化基金
（クリエイター等支援事業（育成プログラム構築・実践））
独立行政法人日本芸術文化振興会

「藝術と技術の対話（DAT）」は、株式会社イッカクが独立行政法人日本芸術文化振興会の文化活動基盤強化基金（クリエイター等支援事業（育成プログラム構築・実践））による助成を受けて実施するプロジェクトです。

I kkac

Japan Creator Support Fund
文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

第1回 藝術と技術の射程
第2回 問題提起型の展覧会へ
第3回 技術とワザの違い
第4回 情報メディアという風土
第5回 西洋と東洋を超える情緒
第6回 デジタル・アートの現在
第7回 これからのアートと哲学の役割
特別回 アートの非地域性

藤幡正樹
メディアアーティスト
大久保美紀
美学・芸術学／情報科学芸術大学院大学准教授
原島大輔
基礎情報学・表象文化論／立教大学現代心理学部映像身体学科助教
サニー・チョン
M+デザイン&建築部門チーフキュレーター
ユク・ホイ
哲学者／エラスムス・ロッテルダム大学教授
細野晴臣
ミュージシャン

DAT
Dialogue on Art and Technology
藝術と技術の対話

講座シリーズ

アート&テクノロジーの概念構築

2025.11-2026.5
https://dat.1kc.jp

料金 ―― 一般：¥6,000｜U25：¥3,000
主催・企画制作 ―― 株式会社イッカク
助成 ―― 文化芸術活動基盤強化基金
（クリエイター等支援事業（育成プログラム構築・実践））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力 ―― TOKYO NODE LAB

DAT 藝術と技術との対話
Dialogue on Art and Technology

◉アート&テクノロジー分野のアーティストやプロデューサー、キュレーター等の専門家の育成を目指す新プロジェクト「藝術と技術の対話（DAT）」。本プロジェクトではエグゼクティブディレクターとして日本のメディアアートのパイオニア的存在であり、これまでに同分野の教育の礎を築いてきた藤幡正樹氏が参画し、講座や調査研究、ブートキャンプ、国内外での展覧会の企画・実施、シンポジウム等の多角的なプログラムを展開していきます。◉ 2025年11月より全８回にわたって開催するオンライン講座は、アート&テクノロジー分野の今日的な役割と批評的視点を身につけるものです。情報化とグローバル化、ブロックチェーンやAIをはじめとする新たなテクノロジーの進展を踏まえ、デジタルメディアによる社会環境の変化やアートシーンの国際的動向を把握し、メディア・技術・美術・哲学を通じた広範なテーマから新たな思考とアイデアを育てます。アートとデジタルテクノロジーによる表現活動が、芸術分野のみならず、ビジネスにおけるイノベーションや事業開発、エンターテインメント領域等のコンテンツ、そして公共サービスやコミュニティ醸成の契機として注視されるいま、その歴史を改めて参照し、未来に向けた新たなアートフォームの形成を目指す最前線の授業です。

アーティストと多彩なゲストとともに、21世紀のアートをテクノロジーから考える。デジタル環境における新たな思考とアイデアを育てる講座シリーズ。

このプロジェクトでは、「藝術と技術、西と東の相対化」を目標とし、育成対象者と共に概念構築を行い、その成果を2つの展覧会で発表する。藝術と技術の関係は、表現と技術、メディウムと技法という形で極めて密接であり、藝術作品の具現化にとって、技術はなくてはならない要素である。ところが、急速に発達したデジタルメディアを巡る芸術の現場では、最新の技術を上手に扱うことができても、その本質を掴み取り、新たなアートの地平を開く作品は多くない。この新しいメディアの固有性を見抜くことをテーマとして生まれたのがメディアアートである。

現在、技術の進化は、すでに人間の知性の領域にまで及んでおり、生成AIでは絵画イメージや映像をプロンプトによって作り出せる段階にまで来ている。このように人間の歴史を丸ごと資源として発達した人工知能は、このまま進めば完全に非人間化の域に達することになるだろう。その時、最後の砦となるのは藝術であることは間違いない。メディアアートはその復権のための最前線に立つことになる。

藤幡正樹

講師

photo:村松正博

藤幡正樹 FUJIHATA Masaki
メディアアーティスト

日本のメディアアートのパイオニア。80年代はコンピュータ・グラフィックス、90年代はインタラクティブアートやネットワークをテーマにした作品を制作。その後、GPSを使ったフィールドワークシリーズを展開。現在は、ARを扱ったBeHereを継続中。1996年、アルス・エレクトロニカ（リンツ、オーストリア）で日本人初のゴールデン・ニカ賞を受賞、2010年文化庁「芸術選奨」文部科学大臣賞、1989年から慶應義塾大学環境情報学部、1999年東京藝術大学、2005年大学院映像研究科の設立に参加。東京藝術大学名誉教授。2017年はオーストリアのリンツ美術大学、2018年は香港バプティスト大学、2020年はUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）の客員教授。

対象者

- テクノロジーを駆使した表現活動においてコンセプトの開発を目指すアーティスト
- アートやエンターテインメント業界において国際的な視点によりプロデュース能力を身につけたい方
- DXやデジタルビジネスのためのビジョンの構築を目指す方
- これからのデジタル環境を見据えた創造的な手法を習得したい方
- テクノロジーの進展に対し、批評分析的アプローチを身につけたい方

カリキュラム

協力：TOKYO NODE LAB

オリエンテーション

申込不要｜参加無料

会場：TOKYO NODE LAB
虎ノ門ヒルズ ステーションタワー8階
アーカイブをYouTubeにてご覧いただけます。
https://www.youtube.com/live/VYqDlg_Puc8

第1回

藝術と技術の射程

2025年11月23日［日］14:00–16:00
講師：
藤幡正樹
メディアアーティスト

1

プロジェクト「藝術と技術の対話（DAT）」では、「藝術と技術、西と東の相対化」を目標に、最終的に採択されたメンバーと共にこの目標のための概念構築を行った後、この3年間の間に2つの展覧会を実現する予定です。本講座は、その前提となる問題点を共有し、概念構築・文脈形成のヒントをリストアップしていくものであり、第1回目は、現状認識から、問題点の抽出と共有に焦点を絞っていきます。

本講座（第２回〜第７回） 有料｜要申込（2026年5月27日［水］まで申込受付。詳細は裏面をご確認ください）

聴講方法 下記3種類での聴講が可能です。

Zoomウェビナー視聴（当日） **会場での参加（当日）** **アーカイブ視聴（開催後–2026年5月31日［日］）**

第2回

問題提起型の展覧会へ

2025年12月14日［日］14:00–16:00
ゲスト：
大久保美紀
美学・芸術学／情報科学芸術大学院大学准教授

2

「展覧会」とは何か。美術展は、物を並べる「陳列」から、物語を伝える「展示」、さらにメディアアートが一つの典型である「参加」へと変貌しつつある。だが、展覧会が単なる現状追認にとどまるとき、芸術の持つ問題を提起する潜在性は発揮されないだろう。「Les Immatériaux（非物質的なものたち）」（ポンピドゥー・センター、1985）等を参照しつつ、これからの展覧会のあり方について議論する。

大久保美紀｜OKUBO Miki：美学芸術学博士（パリ第8大学）。専門は共感論、エコロジーアート、身体論、自己表象のアート。アーティストユニット「florian gadenne + miki okubo」として第10回500m美術館賞グランプリ、清流の国ぎふ芸術祭Art in the CUBE 2023入選。キュレーションした企画展に「遍在、不死、メタモルフォーゼ」（瑞雲庵、2024）、「IAMAS ARTIST FILE #10繭／COCOON」（岐阜県美術館、2025）ほか。主著に『Exposition de soi à l'époque mobile/liquide』（Connaissances et Savoirs、2017）ほか。

第3回

技術とワザの違い

2026年1月18日［日］14:00–16:00
ゲスト：
原島大輔
基礎情報学・表象文化論／
立教大学現代心理学部映像身体学科助教

3

人はこの世界にこれまでに無かった何らかの新しいモノを作り出す存在だが、そのためには作りたいというモチベーションだけでなく、それを実現するワザが必要だ。本来、その両者を切り離して考えることはできない。ところが、技術化が進むことで、現在では知能までもが自動化されるまでになった。哲学者ユク・ホイの提唱する西洋中心に生まれた技術概念以外の技術概念（宇宙技芸等）を取り上げ、検討を加えていく。

原島大輔｜HARASHIMA Daisuke：著書に『Cybernetics for the 21st Century Vol. 1』（共著、Hanart Press、2024）、『未来社会と「意味」の境界』（共著、勁草書房、2023）、『メディア論の冒険者たち』（共著、東京大学出版会、2023）、『AI時代の「自律性」』（共著、勁草書房、2019）、『基礎情報学のフロンティア』（共著、東京大学出版会、2018）など。論考を『美術手帖』『思想』『現代思想』『ユリイカ』等にも掲載。訳書に、ユク・ホイ『ポストヨーロッパ』（岩波書店、2025）、ユク・ホイ『再帰性と偶然性』（青土社、2022）、ティム・インゴルド『生きていること』（共訳、左右社、2021）等。

第4回

情報メディアという風土

2026年2月18日［水］18:30–20:30

4

ネットワークを通した生活スタイルが日常化した現在を「風土」という視点からみると、われわれはデスクトップという均質の風土の上に住み、どこでもない場所を彷徨う永遠の旅行者となる。発信者不明の発言は欲望の無法地帯を生み、政治がそれを汲み上げるまでになってしまった。完全に環境化してしまった情報メディアの上にいかなる文化が醸成されうるだろうか？

第5回

西洋と東洋を超える情緒

2026年3月18日［水］18:30–20:30

5

「日本文化を海外に発信」「海外に認められた」といった枕詞は、国内は海外よりも遅れている前提から成り立っているが、本来作り手の意識は宇宙的に同時進行しているはずである。これを自覚するためには自分の足元を深く掘る必要がある。過去のいくつかの事例に触れつつ、現在位置を確認する。

第6回

デジタル・アートの現在

2026年4月12日［日］14:00–16:00
ゲスト：
サニー・チョン
M+デザイン&建築部門チーフキュレーター

6

デジタルメディアの生活環境への介入に対して、アーティストは作品で応答するものだ。それをすくい上げる組織の存在も望まれるが、これまでの美術史の延長としてこれを取り上げることには無理があるようだ。根本的な生活環境の変化、風土の変化にどのように対応したらよいのか考え、実際どんな出来事が起こっているのか知る。

サニー・チョン｜Sunny Cheung：ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（ロンドン）にて現代美術のキュレーション修士号を取得。これまでにバービカン・センター、ヴィクトリア&アルバート博物館、リバプール・ビエンナーレにて活動。専門は現代美術、デジタルアート、デザイン。M+における主なキュレーション・共同キュレーションに「Beeple: Human One」（2022–2023）、「Pipilotti Rist: Hand Me Your Trust」（2023）、「A.A. Murakami: Floating World」（2024–2025）、「Making It Matters」（2024–）、「Ayoung Kim: Dancer in the Mirror Field」（2025–）ほか。

第7回

これからのアートと哲学の役割

2026年5月3日［日］14:00–16:00
ゲスト：
ユク・ホイ
哲学者／エラスムス・ロッテルダム大学教授

7

多くの技術は未来予測に使われており、ここでは確率という手法が中心となる。つまり過去のパターンから未来予測するのである。この手法が予測できない事象は、亀裂やジャンプである。しかし、これこそがアートの本質であると考えた場合に、未来に突破口を開くことが出来るのはアート以外にはありえない。まだ見ぬアートについて、プロジェクトする方法を議論する。

ユク・ホイ｜Yuk Hui：エラスムス・ロッテルダム大学の「Human Conditions（人間の条件）」研究プログラムを担当。著書である『On the Existence of Digital Objects』（2016）、『中国における技術への問い―宇宙技芸試論』（ゲンロン、2016）、『再帰性と偶然性』（青土社、2019）、『芸術と宇宙技芸』（春秋社、2021）、『Post-Europe』（2024）、『機械と主権』（春秋社、2024）等は十数か国語に翻訳されている。「哲学と技術のリサーチネットワーク」主宰、バーグルエン哲学・文化賞審査員。2025年10月には訳書「ポストヨーロッパ」（岩波書店）刊行。

特別回 ＊アーカイブ配信なし

アートの非地域性

2026年5月27日［水］18:30–20:30
ゲスト：
細野晴臣
ミュージシャン

80年代には音楽の方が新しいテクノロジーに対して先行していた。YMOのコンセプトは、テクノロジーをテコにして、ユーラシアを西にまわりアメリカを横断して戻ってきた黄色魔術音楽というものだった。日本から海外へと波及したこのムーブメントはいかにして作られたのか。そこから地域や国にとらわれない文化芸術を考える。